

別科修了生の学部での学習に対する評価と取り組み

—修了生五名のインタビュー調査から—

大河原 尚

1. はじめに

これまで大東文化大学別科日本語研修課程（以下、別科）では、本学の各学部への進学を希望する学生を対象に、学部での学業に必要な日本語能力を養うことを目的としてきた。ところが、実際は、一年間（長期休暇などを除くと実質約八ヵ月）で、ほとんど日本語学習経験のない来日間もない学生に上の目標に向けて教育を行わなければならないのである。学部入学の留学生に、日本語能力試験の1級合格を課す大学が多い中、一年間の教育によって到達できるレベルは、それにはなかなか及ばない。それにもかかわらず、毎年学部推薦制度によりほとんどの別科修了生が学部に進学している（大河原、1999）。

では、学部に進学した修了生は別科で得た能力や知識で学部での講義に十分ついて行っているのだろうか。仮にそうでないとすれば、別科の教育において何ができるのであろうか。どうしても懐疑的にならざるを得ない。そうした疑問を晴らし、今後の方策を考える上で、これまでの修了生の学部での状況を知ることは大きな示唆を与えてくれるに違いない。

そこで、昨年（1999年）修了後一、二年の元別科生を対象に、学部での授業についてアンケート調査を行なった（大河原、2000）。しかし、そこで得られた結果は、ある程度現実を反映していると考えられるものの、断片的であり、より踏み込んだ調査が必要と考えられた。

本調査では、インタビューにより、別科修了生が学部という学習環境をどのように捉え、その中でどのように自身の学業に取り組もうとしているのかを、以下の三つの面から探ることを目的とした。

1. 時間割作成時に考慮したこと、
2. 修了生が考える「よい」授業と「よくない」授業、
3. 別科と学部での学習環境の違いをどのように見ているか。

2. 別科における日本語教育

別科では、これまで新入学生をレベル別に3クラスに分け授業を進めてきた。そのうち、下の2クラスはほとんどゼロからのスタートとなることが多く、複数の教員が一つのクラスを担当するというのもあって、初級用教科書に沿った文法を中心としたカリキュラムになっている。

ここでは、日本語による日常的なやり取りが円滑にできるようになるというより、学部での勉学において必要となるであろう読み書きの基礎となるような知識及び能力を養成することが目指されている。つまり、学部では日本語の文献を読んだり、レポートを書いたりすることが最も必要となる能力であるという想定があるわけである。

しかし、この想定は修了生の現実に合ったものなのか。また、修了生が学部での勉学を進めていく上で、それだけで十分なのか。別科でのカリキュラムを考えるにあたり、他に視野に入れておくべきことはないのだろうか。検討の余地はあるであろう。

3. 調査方法

より踏み込んだ情報を得るという本調査の目的のために、インタビューによる聞き取り調査を行なった。インタビューは、調査対象者（別科修了生）の別科での授業を一年間担当し、修了後も彼らと交流のある著者が日本語で行なった。ま

た、インタビューは、質問内容を予め大まかに決めた上で、リラックスした雰囲気の下、できるだけ別科修了生からの自発的な発話を引き出すように行なわれた。事前に設定しておいた質問内容は、次の四点である。

1. 学部での時間割作成はどのように行なったか、
2. 好きなあるいは、受けたい授業とそうでない授業はどのような授業か、
3. 別科と学部での授業・勉強の違い及びどちらがいいと思うか、
4. 後輩の別科生に対するアドバイス。

調査対象は、昨年（1999年）の調査で、回答のあった別科修了生の中から、今年度（2000年度）二年生の六名とした。しかし、一名には時間の都合で調査に応じてもらえなかったため、残った五名（以下、修了生）にインタビューを行なった（表1）。

表1：インタビューを行なった修了生の詳細

No	国籍	性別	所属学科	*別科時のクラス
1	中国	女	国際関係	Ⅱ
2	中国	男	日本語	Ⅱ
3	中国	男	経営	Ⅲ
4	中国	男	国際関係	Ⅰ
5	中国	女	日本語	Ⅱ

* 別科時のクラスは上からⅢ、Ⅱ、Ⅰ。

4. 学部の学習環境についての認識

別科を経て、各学部に進学した修了生は学部での学習環境をどのように認識しているのか。次の三つの面から見ていくことにする。

1. 時間割作成時にどんなことを考慮したか。
2. どのような授業を「よい」授業と考え、どのような授業を「よくない」と評価しているのか。

3. 別科の場合と対比して学部での学習環境全体をどのように見ているか。

さらに、そうした認識に立ち、どのように学業に取り組もうとしているのかを、彼らの後輩へのアドバイスの中から探してみる。

4.1. 時間割作成時に考慮したこと

学部生は毎年度初めに、一年間の時間割を作成するわけだが、これによってその一年間の学生生活の枠組みができてしまうだけに、せっかく進学した学部での(学業も含めた)生活の成否がかかっていると言っても過言ではない。そこで、修了生はこの一年間にどのような期待、あるいは見通しを持って決定を下すのか。

表2は一年生及び二年生開始時の時間割作成の際に、五人の修了生が考慮した点である。

表2：修了生が時間割作成時に考慮した点

学生No	1	2	3	4	5
1 単位のとりやすさ	○	①	○	○	①
2 アルバイトのための時間	○		○	○	
3 国で勉強したことをもう一度		○		○	
4 自分の興味		②	○		②
5 将来、役に立つもの			○		
6 去年よかった先生					②

注) ①：一年生時に考慮した点、②：二年生時に考慮した点

○：一年生時、二年生時を通して考慮した点

五人全員が時間割作成の際に考えることとしてあげているのが、「単位のとりやすさ」(項目1)である。単位のとりやすい科目とは、担当する教員が留学生に対し特別の配慮を授業時においてする科目である。具体的には、課されるレポートの量や数が少ないとか、試験のときに留学生と日本人学生とを分けて行なうとか、可否決定に出席を重視するといったことである。また、こうした情報の多く

は、別科出身の先輩から得ていた。

もう一つ注目すべき点は、「アルバイトのための時間」を確保するために、授業の時間帯をできるだけ一度にまとめるということである。勉強もアルバイトも両方しなければならない修了生にとっては、時間をできるだけ有効に使い、アルバイトの時間を確保することが求められる。しかし、学生2と5は、アルバイトはしているものの、それにあまり高い優先度を示していない。二名とも日本語学科の学生で、インタビューにおいても授業や勉強の内容に関する発話が目立った。この日本語学科の二名（学生2、5）は、一年生時と二年生時で、考慮したことが変化している。一年生の時は、「単位のとりやすさ」を考えていたが、二年生になると、それよりも「自分の興味」を重視するようになった。この変化に対する理由の説明として、日本語力が向上した（学生2）、一年間の経験を経て、単位がとりやすいかどうかはあまり考えなくなった（学生5）ことを回答している。また、学生3も一年生時と二年生時とは、どちらも考慮はしたが、重点の置き方を変えたとしている。つまり、二年生時は「自分の興味」や「将来役に立つもの」をより重視して科目の選択を行なった。

この二名（学生2、5）以外は、学部での一年間を経験しても、依然として、単位のとりやすさや、アルバイトが中心的な関心となっている。しかし、学生1は三年生時には「将来役に立つもの」をとりたいたいといった意欲を見せている。その一方で学生4からは今後（三年生以降）に対する見通しや期待は聞かれなかった。五人とも、初めて学部の授業に臨む一年生時には、その不安からより安全に単位が取れるように時間割を作成していた。しかし、別科でのクラスが一番下だった学生4を除けば、一年間の学部での勉学を経験したことで、それ以降の見通しや期待が、自分なりに持てるようになってきていた。

4.2. 「よい」授業と「よくない」授業

時間割を作成し、学部での授業が始まると、実際に学部での授業や勉強を経験することとなる。そこで、単位がとりやすと思っていた科目やおもしろそうだった科目の授業の実際を知ることになる。ここでは、とらなければならない必

修科目も含めて、修了生が学部での授業をどのように評価しているのかを見てみることにする。

まず、彼らが好意的、積極的に評価している授業とはどんな授業であろうか。表3には、彼らが「よい」授業として選んだ理由を示した。

表3：「よい」授業の理由

	学生No	1	2	3	4	5
1	学生や留学生に問いかける	○	○		○	○
2	理解しやすいように教材に工夫がある	○			○	
3	身近な事例で説明する		○		○	○
4	前回の復習をする／繰り返して説明する				○	○
5	簡単な言葉で説明する				○	
6	ユーモアがある話し方		○			
7	自由に勉強できる雰囲気がある					○
8	役に立つ／興味のある内容	○	○	○		

一つの科目に複数の理由をあげた場合もあったが、五人の回答は上の八つにまとめることができた。その中でも、四人の学生が答えた「学生に問いかける」（項目1）は、教員が授業の内容について修了生の国の場合はどうか（学生1）とか、教えた内容が理解できているかどうかの確認のためのもの（学生4、5）などがある。また、項目2の「教材の工夫」では、配布するプリントにキーワードをつけたり（学生1）、視覚教材（ビデオ）を使用したり（学生5）している。さらに、第3、4、5項目の三つも、教員の側が留学生（あるいは学生一般）に対して、分かりやすく教えようとする配慮と考えることができる。

また、「ユーモアのある話し方」（項目6）と「自由に勉強できる雰囲気」（項目7）の二つは、授業での楽しく、自由で、過剰な緊張のないクラスの雰囲気と考えることができる。これは、教員だけが作り出すものではなく、教員と学生双方によってできあがるものであろう。また教員の側から見れば、そうした雰囲気作りに努めるという点で、学生に配慮した授業といえるだろう。

第8項目の「役に立つ／興味がある内容」の授業は、授業の内容そのものが修了生側のニーズと合っていることになるので納得できる結果である。しかし、学生4の場合は授業の内容よりも、分かりやすく教えてくれる授業かどうか、彼の「よい」授業の条件となっているようで、インタビューでは初め「よい」授業はないと答えていた。一方、学生5は、インタビューにおいて、授業で何が勉強できるかという事よりも興味のあることを「先生がよく教え、学生がよく勉強する」ことが理想だとし、学生が「自由に（自発的に）勉強できる雰囲気」を強調している。

次は、修了生が否定的に評価している授業についてである。表4は、彼らが授業を「よくない」と評価した理由である。

表4: 「よくない」授業の理由

	学生No	1	2	3	4	5
1	教員が一方的に自分だけで話している	○		○	○	
2	教科書やプリントがない	○				
3	授業で本を読むだけ					○
4	教員が授業に集中していない					○
5	脱線話が多い			○		
6	緊張した雰囲気で質問もできない			○		
7	授業の内容に興味がない／役に立たない内容	○	○			○
8	全く初めての内容				○	
9	宿題がやさしすぎる					○
10	専門用語やカタカナ語が多い	○				

「よい」授業の場合と同様に、一つの科目に複数の理由をあげた場合もあったが、表4に示したように、十項目の理由にまとめることができた。その中でも、第1項目の「教員が一方的に自分だけで話している」は三名の学生が回答している。学生5も「本を読むだけ」「授業に集中していない」をあげ、教員が聞いている学生に対する配慮を示さない点を指摘している。その点で、学生2を除く四名は、

教員が教壇に立って一方的に授業を進め、聞いている学生のことを考えていない点を「よくない」授業の理由としている（項目1～4）。一方、学生2はインタビュー全般において、教員の授業のやり方についてはほとんど触れていない。むしろ、否定的に評価する授業は、その内容が自分の留学目的に合わないことを強調し、その理由を教員に帰そうとすることはなかった。

項目5「脱線話が多い」は、教員が一方的に授業をするというのではなく、むしろ話題を広げ、学生に興味を持たせようとしているのかもしれないが、そうした意図が留学生には伝わらず、かえって話しの要点をかくし混乱させてしまっている（学生3）。また、第6項目「緊張した雰囲気」は、教員が何らかの意図のもと緊張感を授業に持たせているようであるが、それも学生から見れば、過剰な緊張を強いるだけの結果になってしまっている（学生3）。

もう一つ、三名の学生（学生1、2、5）が答えているのは、「興味の持てない、役に立たない内容」（項目7）である。さらに、学生4は「初めての内容」（項目8）を挙げているが、これも結局は事前に予備的な知識や興味がないことがこうした回答へとつながっていると考えられる。また、項目9「宿題がやさしすぎる」（学生5）というのも、役に立たない授業内容ということになる。

最後に、項目10の専門用語やカタカナ語、特に外国の固有名詞の多用があげられている（学生1）が、これは学生がその授業において学習すべき内容そのものと結びついていて、教員の授業方法が適当でないとか、内容に興味がないとかといったことは、直接関係していないと考えられる。

「よくない」理由を大別すると、教員が学生や留学生に対する配慮が不足している点と授業内容そのものに興味がない点の二つに分けることができる。これは、先に見た「よい」授業の場合と比べると、全くの正反対の結果となっている。つまり、修了生にとっては、学部の授業において教員が（日本語能力不足の）留学生に対し彼らの存在に留意し、授業を進める上での配慮があると認められる授業が「よい」授業なのであり、例えば、授業形態に関係なく自分なりに勉強を進めていけるというのではない。その点において、彼らの学部での勉強は、教員の授業のやり方に依存する部分が大きいと考えることができる。

4.3. 学部と別科の違い

これまで、授業開始時の時間割作成に当たっての修了生の学部に対する見方と、個々の授業に対する評価について見てきた。ここでは、学部での学習環境全体をどう見ているのかを、別科の場合と対比させながら見ていくことにする。

五人の修了生全てが別科と学部では全く違った学習環境であると答えている。では、何が違うのであろうか。その点を修了生はどう見ているのか。表5は、修了生が答えた別科とは違う学部の特徴である。

表5：学部の別科とは違う点

	学生No	1	2	3	4	5
1	自分から質問しなければならない	○			○	○
2	わからない点は授業以外で補わなければならない			○		
3	繰り返し教えてくれないので、忘れてしまう			○	○	
4	日本語の授業がない				○	
5	自由が多い	○				
6	勉強する科目を選ぶのが大変	○				
7	わかる部分とわからない部分があり混乱しやすい					○
8	全て日本語・日本人の環境	○				○
9	授業で日本語と内容の両方に注意が必要			○		
10	授業の内容、教え方が多様になる			○		
11	学生数が多くなる					○
12	授業外にすること（レポート、試験準備）が多い					○
13	（日本語の）授業の内容が難しくなる		○			

学部の別科との違いについて、上の十三項目の回答にまとめることができた。このうち項目1から4までは、自分から積極的に勉強に取り組んでいかずに、受身になって授業だけを受けていたのではやっていけない、という点で共通している。学生2以外の四名がこれらの回答をしている。次の項目5と6は、学生1の回答で、「自由が多い」ことのよい面とよくない面の両方に言及している。これら

の六つの回答は、学部では自由な点が多いものの、それが十分に修了生の肯定的な評価を得られていないことを示している。

第7から10までの項目は、学部での授業に関する回答である。教員の話す日本語にはわかる部分と、わからない部分とが混在していて、その場で要点を掴むことが難しい(項目7)。「日本人の環境」になってしまっているため、教員の話方も速くなり、(日本語能力不足の)留学生に対する配慮がないということである(項目8)。項目9は、日本語にも注意しなければならないために、授業内容に十分に集中できない点が指摘されている(学生3)。項目10では、各授業の多様な内容に加え、教員の教え方も多様なため、何か一つの内容について集中的に勉強することができないということである。これら四つとも否定的なもので、学部での授業が全体的に修了生(学生1、3、5)の日本語能力では十分に対応しきれしていないことを示している。

項目11、12は学生5からのもので、やはり否定的な回答である。授業以外にも授業のためにしなければならないことがあり、そのことで思わぬ時間を使ってしまうと述べている(項目12)。

項目13は学生2の唯一の回答である。学部での日本語の授業では別科と比べると難易度を増したことは、彼にとって、より多くの知識を得られることになり、むしろ積極的に評価していた。

では、反対に別科での学習環境についてどう見ているのであろうか。表6は、修了生が答えた学部とは違う別科の特徴である。

表6:別科の学部とは違う点

	学生No	1	2	3	4	5
1	日本語の勉強だけに集中できる			○	○	○
2	日本語の基礎(聞・話や語彙)が勉強できた		○		○	
3	教科書しか使わない		○			
4	授業間の関連性があり、何度も勉強できた			○	○	○
5	先生の日本語がわかりやすい	○				
6	勉強する科目を選ばなくてもいい	○				
7	授業に行って座っていればいいので楽	○				
8	楽しかった					○
9	学部と比べると低い位置にある					○

修了生から出てきた回答は九つの項目にまとめることができた。第1と2では、日本語の勉強だけに専念でき基礎的な部分を勉強できたとして、別科での勉強を肯定的に評価している。その一方で、学生2は教科書しか使わなかった(項目3)として、不満も示した。しかし、学生2を含めた四名がこれら(項目1、2)の回答をしている。

次の特徴としてあげられたのは、勉強のしやすさである。項目4は、各授業に関連性を持たせて、複数の教員が連絡を取りながら授業を進めている点を指していると考えられる。また、別科では学生が全員留学生であるため教員も学生に合わせて、できるだけ分かりやすい日本語で学生に接している(項目5)。この二つの項目においても、学生2以外の四名が回答している。

その他の特徴としては、項目6、7に見られるように受身の態度でも授業が進んでいくので、楽だとしたもの(学生1)、全体的に楽しかったとだけ答えた(学生4)ものもあった。こうした肯定的な見方の一方で、学生4は別科を低く、学部はより優れた価値を持った「場」として捉えていた(項目9)。インタビューの中で彼は「別科は小学校のようで」学部に進学したときは「何かえらくなったような気分になった」と答えている。

修了生があげた学部と別科でのそれぞれの特徴を見てみると、全体的に学部は否定的な捉え方がなされている。反対に、別科に対しては肯定的な見方が多かった。このことは、学生に合わせていた別科から、学生自身の責任に任せられることが多い学部に行き、その学部での学習環境をまだ十分に、自分の学業に活用できていないことを示していると考えられる。ただし、学生2だけが学部も別科も肯定的に捉えていたことは、注目に値する。

4.4. 学部授業への取り組み

ここまで、修了生が学部での学習環境をどのように見ているかを、三つの面（時間割作成時の考慮事項、「よい」「よくない」授業、別科との違い）から見てきた。そこで、修了生たちは一年間の学部での経験を経て、自分なりの見通しなり、期待なりを持てるようになってきているものの、依然として別科に比べ学部での学習環境は全般的に厳しいものと捉えていた。学部での授業についても、授業の内容もさることながら、教員の対応、つまり留学生への配慮が、彼らが授業を評価する上での大きな要素となっていた。

こうした厳しい学習環境の中で、修了生はどのように学部での学業に取り組もうとしているのか。彼らの、後輩の別科生へのアドバイスの中からそれを探ってみることにする。彼らのアドバイスは、彼ら自身の経験から、学部での学業を進めていく上でこうするべきだといった一つの方向性を示している。そこには、彼らが実際にそうしているかどうかではなく、そうした方向で、あるいは、そうした点に注意して努力していきたいといった彼らの学部での勉強に対する姿勢が反映していると考えられる。

そこで、修了生が後輩の別科生に対して、学部で単位を取り、進級して勉強を進めていくためのアドバイスとして、どんなことをあげているのか。それを示したのが表7である。

表7:後輩に対する学部での勉強のためのアドバイス

	学生No	1	2	3	4	5
1	自分から勉強することが大切				○	○
2	自分の(学部留学の)目的を明確にすること			○		
3	単位より、興味のあることを優先すること					○
4	「会話」ができることが大切	○				

修了生からの回答をまとめると上の四つの項目となった。そのうち、第1から3までは、厳しい学部の学習環境の中にあっても、自分の目的や興味を中心に考え、自分から積極的に勉強して行くことである。さらに、項目4では、そのためには読み書きではなく、日本人との「会話」、つまり聞いたり話したりすることの必要性を説いている(学生1)。彼女によれば、普段の日本人との会話ができるようになるにつれて、講義での日本語も聞き取れるようになったという。つまり、講義で話されている教員の日本語に対する反応が速くなり、その結果大切なキーワードなどをメモできるようになったとした。これらのことから、たとえ厳しい状況にあっても、それに積極的に取り組もうとしている彼らの姿を読み取ることができる。しかし、ここでも注目しておきたいのは、学生2だけは特に学部の勉強についてのアドバイスがなかったことである。

5. 考察 一別科における教育への示唆一

これまでの結果をまとめてみると、修了生は学部での一年間の学生生活を体験することで、今後の学部での勉強に対する見通しや期待を持つことができたようになった。しかし、別科と比べると学部では自分から積極的に取り組まないと勉強ができないのに、自分たちの日本語能力ではまだまだ学部での学習環境を十分に活用できないと考えていた。そして、それが学部への否定的な評価に繋がっていると考えられた。また、授業においても教員からの(日本語能力不足の)留学生に対する配慮ある対応が、彼らの授業評価の大きな要素の一つとなっていた。そ

して、こうした環境の中にありながらも、自分の目的や興味を中心に据え、自分から進んで学業に努めようとする彼らの姿勢が見られた。

ここで、別科での教育について考える上で注目しておきたいのは、学生4と学生2である。学生4は、五人の中でも、一番日本語能力が低く別科のときも唯一最も下のクラスに所属していた。彼にとっては、別科から学部に進学したことは、ある種の優越感を覚える出来事である反面、彼の日本語能力では、学部での一年の経験を経ても依然として当初の不安を期待や見通しに変えることはできなかった。また、学生2では、彼だけが五人の中で目立って日本語能力が優れているとも言えないにもかかわらず、他の四人のように、学部での学習環境に対する否定的な見方をとっていなかった。インタビューでは、終始自分の留学の目的や大学での勉強に対する彼の考え方を述べていた。彼の学部での勉強に対するそうした熱心さが、他の四人には厳しく見えた学部での環境を、彼にとっての一つの挑戦すべき課題として認識させたのかもしれない。

では、こうしたことを踏まえて、あらためて別科の教育に目を移してみると、どんなことが言えるだろうか。そこで、まず修士の後輩である別科生へのアドバイスの中から、別科での勉強に関するもの見てみると、表8ようになる。学部での勉強に備えるための、別科での日本語学習についてのアドバイスである。

表8：後輩に対する別科での勉強に関するアドバイス

	学生No	1	2	3	4	5
1	語彙を中心に覚えること		○	○	○	
2	毎日少しずつ語彙を覚えること					○
3	日能試は結果より、そのための勉強が大切					○
4	意識して日本語に触れるようにすること			○		
5	まちがえても、たくさん練習をすること			○		
6	別科での勉強が学部での基礎となる	○			○	
7	勉強を中心にし、アルバイトは控える				○	○

上の七つの項目のうち、第1項目の「語彙を覚えること」は三人があげている。

さらに学生も少しずつ語彙を覚えていくことの必要性を述べている。これは日本語能力の中でも特に、語彙不足が学部での学習においては決定的なマイナス面となってしまふと修了生が考えていることを示している。その他の項目では、別科のうちに、できるだけ日本語力を向上させておくこと（項目3、4、5）。それは、別科で学習した日本語が学部へ行っての基礎となるからであり（項目6）、そのためにはアルバイトは控え、日本語学習に専念すべき（項目7）なのである。つまり、彼らによれば、別科における日本語の学習は学部での学業のためには必須のものなのである。そして、その必要となる日本語で最も重要視しているのは、講義の聞き方や文献の読み方といった技術的なことではなく、むしろそのための基礎となる語彙力であることがわかる。

しかし、冒頭でも述べたように、一年間の別科ではその日本語能力の養成にも限界がある。では、修了後、その不足を補い学部での学業を助ける上で、別科においてできることには、どのようなことが有るだろうか。そこで注目したいのは、修了生らの学習に取り組む姿勢である。厳しい環境にあっても、自分から積極的に勉強しようとしていた。そうした姿勢を持つことができた理由の一つに、自分の留学の目的なり、勉強したいことなりを明確に持っていたということを指摘できる。学生2の例からもわかるように、明確な目的意識は、自ら進んで勉強していこうとする姿勢に結びついているようであった。別科においても、別科生自身の目的意識を高めることを意識した教育の可能性が考えられるのではないだろうか。

最後に、学部での学習環境に対する精神的準備の必要性を付け加えておきたい。学部へ進学した修了生が抱いた学部での学習環境に対する評価は、別科のそれとは全く正反対のものであった。しかし、その中で自らの勉強を進めていくために、別科の時のような受身の態度ではなく、自分から積極的に勉強していこうとする姿勢が見られた。別科の時から、例えば、学部での講義などを一時的あるいは擬似的にでも経験しておくことができれば、精神的な準備と同時に、それに対する対策も事前に考えておく余裕ができる。自分の学習には自分が責任を持ち、自ら進んで勉強に取り組もうとする態度を育てるためには、先の目的意識を高めるこ

とともに、こうした精神的な準備の機会を持つことも別科での目標の一つとして考えられるのではないか。

6. まとめ

本調査は、インタビューにより五人の別科修了生が学部での学習環境をどう捉え、その中でどのように学業に取り組もうとしているのかを見てきた。日本語能力の不十分な修了生にとっては厳しい学習環境であるにもかかわらず、自分から積極的に勉強に取り組もうとしていることが分かった。その結果を踏まえ、別科での教育に対して、次の三点の可能性を指摘した。

1. 基礎的な日本語、特に語彙力の向上を図ること。
2. 日本留学に対する目的意識を高めること。
3. 学部での学習環境に対し、精神的な準備をする機会をつくること。

最後に、今後に向けて考えておかなければならないこととして、次の二点に触れておきたい。まず一つ目は、今回の調査対象者が学部での学業にある程度成功している学生だけであったことである。別科を終え学部に進学する者の中には、その後全くキャンパスで姿を見かけなくなってしまう者や、退学してしまう者もいる。それらの学生がなぜそうなるのか、また彼ら自身に何が起きているのかはわからないが、少なくともその要因の一つとして別科での過ごし方、日本語学習のし方にまったく問題がなかったとは言い切れない。

第二点目は日本語能力の問題である。今回の調査においても一番下のクラスだった学生（学生4）が一人いた。彼は、他の四名と異なり、一年間の学部での経験でも、当初の不安を今後の期待や見通しに変えることができなかった。二年、三年と経験すればそうしたことができるよになるのかどうかはわからないが、彼のような日本語レベルが相対的に高くない学生にとっては、学部での学習環境と本人の日本語能力との間には相当の差があることが予想できる。今後の別科のあり方を考える上では、そうした能力の低い学生たちがその差にどのように対処しているのか、またはできていないのかを知ることも重要であろう。

参考文献

大河原尚（1999）「別科の現状と今後の課題」『別科論集』創刊号、大東文化大学別科日本語研修課程、99-109。

大河原尚（2000）「別科修了生の直面している日本語の問題」『別科論集』第2号、大東文化大学別科日本語研修課程、43-68。

高橋一男（1996）「インタビュー法」『社会調査の基礎』、放送大学教育振興会、165-177。